（第3種郵便物認可）　北海道新聞　1992年（平成4年）9月29日（火曜日）

日中国交正常化20周年

日本と中国は今月二十九日、国交正常化二十周年を迎える。この間、一九八九年の天安門事件、冷戦構造の崩壊など幾多の曲折を経ながらも、両国関係は政治、経済、文化などあらゆる面で飛躍的に拡大を遂げた。十月には天皇、皇后両陛下の史上初の訪中が計画され、国民レベルでの交流も一段と深まるに違いない。冷戦の終結で新たな世界秩序が模索される中、「一衣帯水」の日中両国の関係は、二国間にとどまらない世界規模の重要性を持つに至っている。しかし、この二十年間の両国関係には、日本の中国侵略という「過去」にまつわる影もつきまとった。教科書問題や靖国神社公式参拝などをめぐる中国の激しい批判と、日本の譲歩という外交パターンは日中間の「負の遺産」の根深さを改めて印象づけた。二十一世紀に向けた日中関係はこうしたマイナス要素を克服しつつ、両国のより幅広い市民レベルの交流をどう拡大していけるかにかかっている。その意味で、「日中友好」はスローガンを超えた具体的な内実が問われる時代を迎えた。

日中国交正常化二十周年にちなんで、国際関係論の手法で中国学を発展させた中嶋嶺雄・東京外国語大学教授と、中国の高級幹部子弟の立場から一転、反革命分子のらく印を押されるなど激動の体験を持つ唐亜明氏に「日中二十年」を語ってもらった。

（敬称略）

関係打開

中嶋　日中国交正常化は、米中接近という国際政治の大きな転換点で、アジア情勢が急を告げるという臨場感があった。

佐藤内閣は日米安保体制という冷戦政策の「拘束」の中で、中国との関係打開を探った。当時、美濃部東京都知事に託し、周恩来首相に送った秘密の「保利（茂）・自民党幹事長）書簡」の起草に、私自身かかわったので感慨深い。日中国交は時の流れとはいえ、あっという間にできたのは、佐藤（栄作元首相）さんが、慎重にチャンネルを開いたからだろう。

唐　重要な指摘だと思う。中国では佐藤政権は「反動政府」だという認識を変えておらず、国交は田中（角栄元首相）さんの功績になってますから…。

中嶋　佐藤内閣は台湾を守る立場で、できるだけ選択の幅を残しておく考えだった。われわれ学者は、七二年九月の田中訪中は外交セレモニーだけで、台湾問題などは時間をかけて処理するだろうと思っていた。一気に国交正常化に行った。非常にドラマチックだった。日本は大きなサイを投げ、台湾を切り捨てる方にかけた。日中国交二十年は「日台断交二十年」ともいえる。

唐　私にも感無量の二十年だ。あのころ、私は自分の運命を変えようと、アコーディオンと日本語を習っていた。中ソ国境紛争の直後の六九年に、黒竜江省の農村に下放（注＝労働を通じた思想改造）され、毎日が鉄砲を撃つ訓練。母が病気になったので、北京に逃げ帰っていたころになる。

父は三〇年代に日本に留学、社会主義思想に触れ、帰国後は延安（注＝中国共産党の根拠地）に行き、革命に参加した。文化大革命の時は、人民日報の総編集長をしていた関係で、江青（毛沢東夫人）にらまれ、日本留学が罪となり、スパイにされた。七二年はまだ守る立場で、できるだけ選択の幅を残しておく考えだった。

中嶋　あなたも文革の犠牲者だ。

唐　日本語はスパイとされた日本女性から習っていたが、私はどうせ反革命家庭の子供だからと思って、動じなかった。両親はずっと、革命幹部として日本と戦ってきた。だが、私にはいま日本人の妻がいる。日中国交正常化は、私の人生観を変えたともいえる。

中嶋　私の初訪中は、文革直後の六六年。宇宙にでも行く雰囲気だった（笑）。日本では一方が中国を「天国」と描き、他方は「地獄」としていたから…。

国交正常化を全体的にみてみると、中国の方が得たものが大きかったのでは。ソ連はひょっとすると国境紛争を利用し、中国の東北部に攻め込んだかもしれないが、日、米との関係が抑止力になった。

また中国の庶民にとっては、日本を通じ西側世界の現実を見ることで、毛沢東思想が大いなる虚妄だったことが分かった。非毛沢東化がやがて、改革・開放につながった。

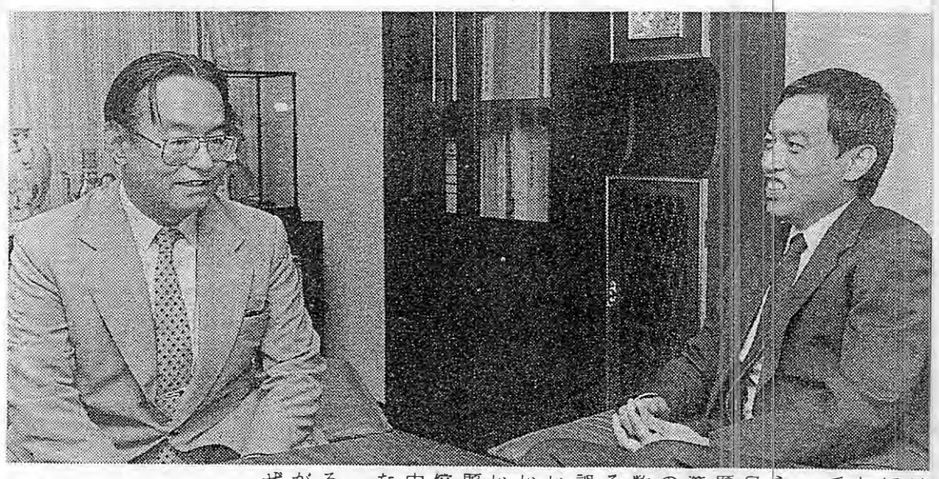
中嶋嶺雄氏

曲折を越え新たな時代

過去、現在、未来を語る

中嶋　嶺雄（なかじま・みねお）1936年5月、長野県松本市生まれ。東京外大中国語科卒。東京外大教授、社会学博士。専攻は国際関係論・現代中国学。主な著書に「中ソ対立と現代」（中央公論社）、「北京烈烈」（筑摩書房）、「中国の悲劇」（講談社）などがある。

唐　亜明（タン・ヤミン）1953年、北京市生まれ。「中国旅行新聞」編集者を経て、83年に来日。早大文学部卒後、福音館書店編集部勤務。自らの文革体験をもとに書いた「ビートルズを知らなかった紅衛兵」（岩波書店）などの著書がある。東京都在住。



中嶋氏　もっと率直な対話を
唐氏　大人の付き合い大切

は勇ましいが、現実には難しい。中国の人たちも前向きに提案してほしい。

中国建国の四九年からほぼ半世紀。中国自身の社会主義建設の問題もある。どうして経済面で遅れてしまったのか。文化大革命では数千万人が死傷した。そして天安門事件…。誤解されるかもしれないが、賠償を取っていから、中国がうまいかなかったという問題ではない。「戦争賠償」に逃げ込む側面も中国側にはあるのではないか。

唐　賠償を求めている人は戦争の経験者だが、普通の人々は、なぜ放棄したのかはっきり

「日本と中国は友人と言うより少し距離をおいた隣人の関係に…」と語り合う中嶋嶺雄氏（左）と唐亜明氏

＝北海道新聞東京支社

戦争の傷跡

唐　亜明氏

小さい国、日中戦争で負けた国なのに、どうしてわれわれより、ずっと豊かなのかと。そういった心理的な影響は大きかった。

政治的には、国交正常化で、ソ連に対抗しようとの思惑はあったが、庶民は早く近代化したい…という意識に目覚めた。われわれは毛沢東思想を信じていたが、どんどん入ってきたものを見て変わっていった。

ただ、共同声明では放棄をうたった戦争賠償の問題がある。いま中国でその声が高まっている。

中嶋氏　賠償「台湾」がネック
唐氏　多様な方法でも可能

中嶋　デリケートで重要な問題だ。日本はアジア諸国に賠償している。中国の場合は、中華民国が放棄した。日本人のメンタリティーとして、蒋介石の以徳報怨（注＝うらみに報いるに徳をもってする）が、ありがたかったとの意見もある。

権力の承継として、中国人自身の台湾問題が残っている。これがなければもっと単純だった。日本の政府・外務省はあれですんだと言う立場だが、現実に被害を受けたのは大陸の人々だった。だから二重に難しいし、日本が本当の意味で対応をしなければ、終わらない。

唐　政治的意味も強いが、日本にとっては「ただより高いものはない」ということになっているのではないか。賠償しないと終わらないでしょう、交通事故でも。普通の人々の思いをどう解決するか。残されている大きな問題だと思う。

中嶋　賠償のスローガン